

台湾文学研究の現在

— 歴史・言語・共同性をめぐって —

山口 守

一 台湾文学の認知——単一化を超えて

台湾文学が日本社会で幅広く認知されてきたのはここ二〇年くらいのことだろう。もちろんそれ以前に台湾文学が全く知られていなかったというわけではない。その源流を遡及して日本の植民地統治期まで遡るのはテーマが過大であり、また本稿の意図ではないので置くとして、日本政府が中華人民共和国と国交関係を樹立し、同時に中華民国と国交を断絶した一九七二年以降に限って見ても、東京の『台湾近現代史研究』(1)や関西の『啞啞』(2)のような同人研究誌にもある程度の研究蓄積があり、また八〇年代には戦後日本で初めて本格的に戦後台湾文学を翻訳紹介した『台湾現代小説選』三卷(Ⅰ『彩鳳の夢』・Ⅱ『終戦の賠償』・Ⅲ『三本足の馬』)(3)の画期的な仕事がある。これは同時期の侯孝賢や楊徳昌ら台湾ニューウェーブ映画の日本における紹介とも重なり、八〇年代に台湾文学の認知を広めた重要な仕事であり、また台湾文学の豊かな果実を味わう体験へと読者を導いてくれた点で、大きな功績を果たした。また各巻末にある松永正義や

若林正文の解説も、戦後台湾文学を読み解く文脈について貴重な手掛かりを与えてくれた。

だが広がりを持つ本格的な研究の開始は九〇年代まで待たなければならない。それには日本社会の状況よりも、一九八七年戒厳令解除に始まる台湾社会の民主化や国際政治情勢の変化など、外的な理由が強く働いて、それに触発されるように共時的な動きとして台湾文学研究や翻訳が進展した側面がある。日本における台湾文学研究は、それが妥当であるかどうかを別にして、台湾社会の変化や東アジアを中心とした国際情勢を反映した一面が確かに存在する。台湾は日本の植民地統治や蒋介石国民党の専制政治を歴史として抱えながら、常に国際政治という荒波に晒されて自らの社会のあり方を考えなければならず、また大陸中国との関係が常に緊張感をもたらす政治的な文脈を抜きにしては文学も考えることができない状況にある。「台湾文学」とは、台湾社会における文学と見なして、台湾の社会や歴史を文脈とする場において捉えなければならぬ局面がある言語芸術なのである。J・L・ナンシーが言うように「書物も音楽も民衆も、そのままでは

メッセージの担い手や媒体にはならないのである。メッセージという機能は社会に関わっているものであり、共同体には場をもっていない」(4)とし、台湾文学の持つメッセージ性を読み解くには、台湾社会を読み解く必要があることになる。ここではそうした時代の流動性や社会の変化を前提としながらも、前世紀九〇年代から二一世紀の今日に至る、日本における台湾文学研究の自立的な歩みを、研究書を中心に概括しておきたい。

その嚆矢となったのは、台湾における生活体験を持ち、国民党による専制政治下で台湾文学研究が容易でなかった時期に研究を開始した三人の研究者の著書である。まず下村作次郎『文学で読む台湾——支配者・言語・作家たち』(一九九四)(5)は、巻末に戦後日本における台湾文学研究文献リストを付していることから分かるように、台湾文学研究の歴史を俯瞰しながら、この時点までの著者の研究蓄積をまとめたものだが、戦前日本植民地統治期から戦後初期台湾文学までを連続する一つの実体として記述する点で、台湾文学の全体性に目を向けさせた先駆的な研究である。同書では、主として一九三〇年代以降の台湾作家を取り上げて、日本による過酷な植民地統治の下で、台湾作家が帝国の言語である日本語を表現手段として、どのように近代文学の実践を展開していたかを説明することから始め、それが戦後初期の魯迅受容へと連続する流れがあったことを指摘することで、台湾文学の通時的な捉え方の必要性を実感させてくれるものであった。また書中の一節を先住民族(6)の文学に割いている視点は、

後述する同著者の『台湾原住民文学選』(草風館)の翻訳の仕事へと繋がっている。

同書が言及した魯迅受容の問題は、後に黄英哲『台湾文化再構築』(一九九九)(7)において、一段と深化した研究として全面展開されている。黄英哲は日本の植民地統治終了後、中華民国政府が台湾を接収・統治する過程を、台湾省行政長官公署・編訳館・台湾文化協進会など統治制度や機関の面から丹念に追い、戦後初期台湾の祖国復帰文化事業において、魯迅思想の受容に見られるような中国的近代への憧憬と、それを受容する台湾の人々の自立的な近代志向が、時に一体であり、時に平行的であり、また時に相反する局面があったことを明らかにしている。同書の中で取り上げられた魯迅の旧友許寿裳については、黄英哲が編者の一人となった『許寿裳日記』(一九九三)(8)の刊行によって、戦後初期台湾と大陸中国の接合を考える際の資料的空白の一部が埋められている。

先の下村作次郎の書と同時に刊行された垂水千恵『台湾の日本語文学——日本統治時代の作家たち』(一九九五)(9)は、日本語文学として台湾文学を読むという立場から、戦前・戦後の日本文壇でも名が知られている邱永漢、周金波、陳火泉、王昶雄、呂赫若らを取り上げて、帝国支配下で第二言語として日本語を駆使した台湾作家の営為を説明しようと試みている。日本語文学という概念を使用することで、国民文学的な文学観では立ち行かない台湾文学研究の難しさ、また多元的な豊かさを浮かび上がらせながら、それゆえにこそ

新たな文学観構築へ向かわなければならぬ点を意識した研究書だが、ドゥールーズやガタリがかつて提唱したマイナー文学のように、アイデンティティと使用言語の単一化した枠組を解体すると同時に、更に進んで固定観念に基づいた文学研究という枠組すら脱構築する必要があることを予感させた。実際に、後に著者は日本統治期から戦後初期に活躍した作家呂赫若を日本で初めて本格的に論じた『呂赫若研究』(二〇〇二)(10)において、日本語作家としての呂赫若の文学活動ばかりでなく、東宝における音楽・演劇・ラジオ放送など諸領域を横断、越境するものであったことを実証的に明らかにしている。単なる国民文学観でも、或いは植民地文学観でも読み解けない多元性が台湾文学にあることを鋭く見抜いている視点は、多様性や多層性という台湾文学の他の特徴と併せて考えることでいっそう意義深くなる。

岡崎郁子『台湾文学——異端の系譜』(一九九六)(11)は、一九七〇年代台湾に留学した著者が、当時台湾社会で公的には禁忌であった台湾文学に惹かれ、やがて研究に乗り出す熱い思いに貫かれた書である。二二八事件から説き起こして、邱永漢、陳映真、劉大任、鄭清文、トパスを取り上げて戦後台湾文学を論じる中で、同時に日本・中国・アメリカの存在が台湾文学に投げかける影や力も解き明かそうとした研究だが、著者はここで取り上げた作家の翻訳も平行して行い、陳映真「山道」(12)、劉大任「デイゴ燃ゆ」(13)、鄭清文「阿里山の神木」(14)を日本語訳している。なお著者は近年日本語

作家黄靈芝の研究にも乗り出している(15)。

実質的にはこの三人より早くから台湾文学研究を開始していた河原功の『台湾新文学運動の展開——日本文学との接点』(一九九七)(16)は、その副題からも分かるように、日本文学の視点から台湾文学研究に進んだ著者の研究成果であり、必然的に日本統治期の台湾文学に焦点が絞られている。実は従来の文学研究の枠組で見れば、台湾文学研究にはそれまで中国文学・日本文学・台湾文学という三つの入口が存在していた(所謂学術が大学制度と結び付いているという意味で言えば、現在でもその構図が存在する)。だが前二者から出発する研究は、中国語・日本語という言語に規定されつつ常に台湾文学を周縁と捉える立場を招来する危険性と、逆に周縁ゆえに中心に対して批評性を確保する相対性を、諸刃の剣のように(時に袋小路のように)併せ持っている。それを克服する方法の一つは日本語文学という視点だが、本書は日本文学から出発しながらそこに留まらず、台湾文学は日本語作品をも含む多様性を持っていることを明示している。それは本書の後半が「台湾新文学運動」の時代区分や流れの解説に割かれていることでも分かる。日本統治期台湾文学研究に関するその緻密な実証研究は、台湾文学における日本語部分の体系的研究への第一歩である。著者はこの啓蒙的な仕事から更に個別研究を充実させ、『翻弄された台湾文学——検閲と抵抗の系譜』(二〇〇九)(17)において、楊逵・吳新栄・吳濁流ら台湾の日本語作家の創作実践をめぐる社会的背景と、中村古映・佐藤春夫・濱田隼雄ら日本人作家の台湾観を

まとめ論じること、日本の植民地統治下で展開された台湾の文学実践に、台湾人作家であれ日本人作家であれ、帝国日本の存在が大きく影を落とす一方、抵抗精神の堅持や觀察的立場による他者としての台湾観など、同化を拒否するか、或いは統治者の観点と一致しない様々な文学事例があることを解説している。同書の後半で詳述される日本統治下の検閲制度の実態を見れば、植民地統治そのものの暴力性と文化破壊の実相が見えてくる。

一方戦後台湾文学に関する研究を見れば、日本における台湾文学研究の基礎を築いた松永正義の『台湾文学のおもしろさ』(二〇〇六)及び『台湾文学を考えるむずかしさ』(二〇〇八)(18)は、刊行時期こそ近年だが、著者が研究を始めた一九七〇年代以降の研究蓄積と方向性が分かる研究書である。前者では陳映真や施明正ら社会運動と切り離せない作家や郷土文学や国語問題を取り上げて、戦後台湾文学を理解する鍵が歴史認識や言語にある点を明らかにしようとしている。後者は著者の関心を発展させた形で台湾語問題を扱う一方、台湾文学研究の参照例として現代中国への視座や竹内好の思想を論じている。いずれも中に盛り込まれているテーマは多種多様で、台湾文学を考える時に実に多くの視点が必要であることを実感させられる。

二 台湾文学研究の新しい展開

——ポストコロニアリズムから超域化まで

以上のような研究が、台湾文学を考える基礎を築いたもの

とすれば、一九九〇年代半ば以降に続々と刊行される研究書は、台湾文学を新たな視点で語り始めた果実と言えるかもしれない。最初に登場したのは『よみがえる台湾文学——日本統治期の作家と作品』(一九九五)(19)だが、これは一九九四年台湾の清華大学で開かれた「頼和およびその同時代作家——日本統治期台湾文学国際学術会議」で発表された論文から、日・台・米二〇編の論文を選んだ論文集である。実はこの会議自体が日本統治期の文学を「台湾文学」と呼び、なおかつ「国際」的な会議であつたことで、戒嚴令解除後の台湾における台湾文学研究の新たな出発を告げる重要な意義を持っていた。戦後台湾では、台湾文学を語るところか、その概念すら公的な認知を受けていなかった歴史が長く続き、台湾文学の、しかも日本統治期の文学を論じることはいっそう困難であつた。戒嚴令解除後は、中華ナショナリズムを体現する作家でさえもはや「中国文学の一部としての台湾地区の文学」という虚構性を全面的に主張することはできず、例えば外省人作家余光中は、かつて「一九五〇年から七〇年までの二〇年間に中国作家が台湾で発表した」(20)作品を収録した『中国現代文学大系』を刊行したが、「一九七〇年以降二〇年間に台湾で発表された代表的な文学作品」(21)を収録した叢書には『中華現代文学大系』と名付けざるを得なくなっていた。中華という呼称は形式上中国を拡大した概念のように見えるが、実は台湾文学を中国文学の枠内に収めることができなくなった結果、より包括的な中華概念を採用せざるを得なくなった戦略的選択だったように思える。言ってみれば、

ば、台湾における文学実践が本質的に多様であることを認めないと、中華現代文学という本質主義も維持できないジレンマの結果だったかもしれない。こうした背景を持った『よみがえる台湾文学』は、中国語作家頼和から二重言語作家楊遠・呂赫若まで、或いは漢詩から新詩まで、更に左翼文学から皇民化文学までと、実に多岐にわたるテーマを含み、新たな出発点らしい混沌とした研究状況を示しつつ、同時にそれが台湾文学の多様性を表している点で斬新な企画であった。

同書に収録された論文では、藤井省三が大東亜戦争期の台湾における文壇成立と台湾ナショナリズムの関係を論じているが、後にこの視点は『台湾文学この百年』（一九九八）⁽²²⁾で全面展開されることになる。これは同著者の『中国文学この百年』（23）と同じく入門書的性格を持っているが、日本統治期台湾において、読者市場と国語の観点から日本語文学が台湾ナショナリズムを形成していくという独自の見解を示し、戦前・戦後の台湾文学を全体的に捉えようとした試みであり、台湾文学研究に社会史的 분석を導入した先駆者としての研究姿勢が鮮明に表れている書である。藤井省三は自らの台湾文学研究の出発点となる李昂『夫殺し』に早くから注目して日本語に翻訳しているが⁽²⁴⁾、その後も李昂を始めとして台湾文学の翻訳に積極的に取り組んで、一九九〇年代以降台湾文学紹介の第一人者となっている。中国文学研究者が台湾文学に取り組む場合、中国語を媒介とするため、中国文学との距離の取り方を意識する場合が多いが、藤井省三は中国語文化圏の文学という幅広い視野によってその問題を乗り越

えようとしているように見える。

この他、論文集形式を採った台湾文学の研究書が一九九〇年代後半以降に何冊かある。まず『台湾文学研究の現在』（一九九九）⁽²⁵⁾は、台湾文学研究の先達である塚本照和の古稀記念論文集として編まれたものだが、研究者の論文以外に台湾から鍾肇政、王昶雄が日本語で、葉石濤が中国語で寄稿していて、日本統治期から続く文学伝統の貴重な声の集録ともなっている。更に今世紀に入ってから、日本台湾学会学術大会の内容を反映した論文集が二冊刊行されている。一九九八年に設立された日本台湾学会は、それまで各グループ、各個人の努力によって担われていた台湾研究を集約して、台湾学の確立を目指した学術組織だが、今日まで台湾学の研究蓄積以外に、方法論や理論の検討、及び若い研究者の育成に大きく寄与している。

まず『台湾の「大東亜戦争」』（二〇〇二）⁽²⁶⁾は、二〇〇一年日本台湾学会学術大会分科会企画の『決戦台湾小説集』をめぐっての発表や討論をまとめたもので、戦時下台湾の文化政策を総括的に捉えようという意図があった。同書の大きな特徴は、文学を既成の固有領域に閉じ込めず、メディア・演劇・映画など文化諸領域との関連・融合・越境のうちに考えようとしている点にある。台湾文学が既成の国民文学観どころか、従来の文学研究の枠組を解体して、新たな理論や方法論の舞台になり得ることは、執筆者の顔ぶれでも分かる。池田浩士、黒川創、四方田大彦、西成彦らドイツ文学・日本文学・比較文学の各分野で活躍している研究者の関与

が、台湾文学研究の新しい視座や方法論の検討に有効に働いている。また星名宏修のような若い研究者のポストコロニアリズムの視点からの研究を収録している点も同書の価値を高めている。星名はそれ以前の論文でも優生学的な血縁概念を批判して、植民者と被植民者の間に横たわる支配／被支配の關係が個人の身体内部にまで浸透するメカニズムを、文学作品の解析を通して明らかにしてきたが、収録論文「植民地の「混血児」——「内台結婚」の政治学」を読むと、ポストコロニアリズムが台湾文学研究において重要なのは、単に歴史的視点を組み入れることではなく、文化支配の形態や近代化言説を多面的、批判的に論じることができる点にあることが分かる。

この方面の研究に目を向ければ、丸川哲史の『台湾、ポストコロニアルの身体』(二〇〇〇)及び『台湾における脱植民地化と祖国化』(二〇〇七)⁽²⁷⁾は、歴史的視点を更に政治にまで推し進め、東アジアの近代という視点から台湾文学を再考する実践として独創的である。前者では大陸中国や日本を参照例として台湾の言語や文化をポストコロニアリズムの視点から論じているが、後者ではその問題を特に戦後初期の二二八事件前後の文学運動に焦点化して、日本植民地統治と抗日戦争という異なる集団記憶を持つ人々が出会い、摩擦を生じる戦後初期台湾の文化や政治状況を論じながら、その後の冷戦や近代日本の脱植民地化を射程に入れようと試みている。これらは森宣雄『台湾／日本——連鎖するコロニアリズム』(二〇〇二)⁽²⁸⁾と並んで、小林よしのり『新ゴーマ

ニズム宣言SPECIAL台湾論』のような植民地支配肯定派の愚劣な議論への厳しい批判となっている。

ポストコロニアリズムの立場から台湾文学を論じた研究として特記しておかなければならないのは、フエイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール』(二〇〇七)⁽²⁹⁾である。英語著作 Under an Imperial Sun の日本語訳だが、台湾の日本語作家・在台日本人作家・外地の日本人作家を取り上げ、植民地を巡る多角的視野を駆使して、人種・ジェンダー・階級・言語など諸要因から帝国日本による植民地支配下台湾の文学状況を読み解こうとする。楊達、呂赫若、周金波、陳火泉ら台湾作家が描く帝国日本と、西川満や佐藤春夫の描く植民地台湾を交差させて帝国の姿をあぶり出すだけでなく、中島敦の南洋体験、林美美子のベトナム体験にも言及することで、日本の台湾植民地化が後発帝国主義による植民地主義そのものであることを明らかにしている。『台湾万葉集』(一九九四)⁽³⁰⁾から短歌を引きながら「日本語で教育を受けた世代全員が、植民地の最後の記憶、言語、詩歌をあの世に持っていくてしまいうまで、ポストコロニアルの時代は真には始まらないのだ」(31)と語る著者の言葉の重さを受け止めずに、台湾文学研究を進めることはできない。またこれはポストコロニアリズム研究を標榜しても、単に第三世界文学観に寄りかかって自らを免罪するにすぎない傾向への警鐘となっているように思える。

『台湾の「大東亜戦争」』と同じく日本台湾学会における研究発表や討論を元にした論文集に『記憶する台湾——帝國と

の相剋』(二〇〇五)⁽³²⁾がある。同書は台湾文学研究において文学・メディア・映画どこかポップカルチャーまで視野に入れる必要があることを意識させる点で、台湾文学研究の領域流動化に寄与しているが、ここで議論の焦点は記憶を語る言葉と主体の問題である。この点に関して同書で最も刺激的な議論を展開しているのは、「思考不可能性は、植民地的構想の限界を超えて考えることの出来ない日本中心主義、つまり知識のモードの限界が植民地的差異によって常に既定されていることを示唆する」(33)と日本の植民地主義的言説を批判するレオ・チンである。サバルタンの記憶が無視され続けてきた歴史を鋭く告発しながらも、究極のところでは自らも先住民族の歴史を特権的に語り得ない水準まで記憶と主体の問題を突き詰めている議論は実に深みがある。客観を装っても、沈黙を選択しても、或いは被植民者に感傷的に寄り添うことで自らを免罪しても、植民地主義的言説をいまだ徹底して克服できない日本の台湾研究を検証する必要性を痛感する。

集団的學術活動の成果としてではなく単独の論文集として刊行された『越境するテキスト——東アジア文化・文学の新しい試み』(二〇〇八)⁽³⁴⁾は、収録論文タイトルにエクリチュール・モダニティ・ディスコースなど西洋文芸批評用語が列記されているが、これは論文著者の大半が台・米・中と日本以外の研究者であることと関係しているだろう。台湾文学だけを扱った書ではないが、文学研究が欧米の文学批評動向を追っている地域における台湾文学研究を参照できる。

一方新たな台湾文学研究の視座を提供してくれたものとして、池田浩士『「海外進出文学」論序説』(一九九七)⁽³⁵⁾を挙げておかなければならない。同書はドイツ文学研究者である池田が日本文学について論じたもので、台湾文学を直接扱ったものではないが、帝国日本が軍事侵略・支配した国や地域において日本人作家がどのような体験を持ち、文学創作に植民地・占領地認識がどのように表れるかを論じる中で、帝国／植民地問題を考える貴重な視点を提示している。シャーロック・ホームズのシリーズに登場する医師ワトソンがアフガニスタン帰りとして設定されている例のように、探偵小説には植民地形象がたびたび登場し、また植民地を舞台とする近代小説に探偵小説的要素が含まれていることは、日本文学で言えば佐藤春夫の台南を舞台にした『女誠扇綺譚』でも確認できる。植民地が帝国の人間にとって未開で、神秘性に満ちている限り、解けない謎を解く作業が文学作品の中で行われるのである。戦後になって台湾を舞台とした探偵小説を発表した日影丈吉の作品に、池田は体験の内面化のための長い時間の必要性を見る。他にも朝鮮・中国・南アジアなど日本軍の侵略に伴って現地体験を持った日本人作家を取り上げながら、池田は「侵略を、侵略」と明言することによってわたしたちを停止させてしまおう」思考停止状態から一歩踏み出そうとしている。つまりレオ・チンが語る「思考不可能性」を克服する実践の一つとして池田の仕事があるのではないかという気がする。日本文学における外地・植民地・占領地の問題に関しては、これまで尾崎秀樹、河村漢、黒川創ら

の優れた研究があるが、『海外進出文学』論序説が新しい研究として価値あるのは、当時の作家たちの感情や視線を追体験するという困難な作業に挑みながら、現在を生きる我々の問題として現前させる努力を果たしている点にある。

研究書紹介の最後に台湾文学史の研究について触れておきたい。台湾文学の場合、その認知すら遅れていた状況の下では、通史を書くことが台湾文学概念生成過程の一環でもあった。例えば日本で翻訳された葉石濤『台湾文学史』(36)、彭瑞金『台湾新文学運動四〇年』(37)は、台湾研究者の文学史記述自体が台湾文学概念を形作っている例である。一方、戦後日本で初めて書かれた台湾文学の通史とも言うべき山口守編『講座台湾文学』(二〇〇三)(38)は、藤井省三・河原功・垂水千恵・山口守の四人の研究者が二〇〇一年国際交流基金アジア理解講座で行った講座内容を元にしたもので、『台湾文学とは何か』・『植民地体制と台湾新文学』・『戦時下の台湾文学』・『戦後台湾文学の流れ』を大きなテーマとして、清末から二〇世紀末まで百年の台湾文学の流れを時系列的に追って論じている。それぞれの研究分野を中心に記述しているため、台湾文学史全体を漏れなく詳述しているわけではないが、多元性というキーワードは共通している。台湾文学とは何かという本質主義が複数あることが、逆に台湾文学の多様性を示していることを踏まえた上で、更に多様性の強調が各自の境界を鮮明にしてしまう本質主義の固定化を避けるため、多元性という概念は重要である。

三 台湾文学の翻訳について

台湾における日本語文学は翻訳ではないという立場に立てば、ここで日本統治期の日本語文学を刊行、紹介する仕事を取り上げる必要はない。しかし筆者はそうのように考えない。酒井直樹『日本思想という問題』の「翻訳とは社会編制における非連続の単独点において連続性を作り出す実践以外の何者でもない」(39)との指摘を参照すれば、台湾作家のように第一言語から第二言語へ自らの内部で解釈者として「翻訳」行為を行うか、或いは第二言語の世界へ介入を行う場合、日本語作品もある種の翻訳と見なすことが可能である。もちろんそれを説明するには綿密な議論が必要だが、ここでは台湾文学が日本語作品を含む多様性を有するという特徴を認める意味でも、まず台湾作家の日本語作品の刊行について簡単に紹介しておきたい。

今世紀初頭より刊行の始まった二つの文学叢書『日本統治期台湾文学集成』(40)及び『日本植民地文学精選集』(41)は、日本統治期台湾文学を網羅的に読むのに便利なシリーズである。前者は時代区分として日本統治期に限定しているが、当然ながら日本語作品ばかりでなく中国語作品を含んでいる。帝国日本支配下で二つの言語が平行、交差、関与しながら文学創作が行われる状況を反映した編集と言えよう。これによって日本統治期の小説・詩・戯曲・随筆など各形式の文学作品が二種類の言語でかなり読めるようになった。後者は台湾編を含む叢書で、朝鮮や満洲など旧日本占領地・支配地の

日本語文学を収録している点が特徴的なシリーズである。植民地台湾の文学を考える時、同じく帝国日本に植民地支配されていた朝鮮など他地域の日本語文学を参照することで、各植民地・支配地間で連鎖・関与する問題が台湾固有の問題とどのように関係するかが見えてくる。また同時に、そうした日本語文学によってあぶり出される近代日本やその文学も再検証する必要があることが分かる。この視点に注目すれば、単行本として出版された『周金波日本語作品集』(42)は、皇民文学という位置付けの裏に隠された近代日本の日本人性「Japaneseness」をめぐる議論に貴重な思考の手掛かりを与えてくれる。

次に戦後台湾文学の翻訳について見れば、一九八〇年代の『台湾現代小説選』三巻の仕事の後、九〇年代に短編小説集『バナナポート——台湾文学への招待』(43)、朱天文『安安の夏休み』(44)、『世紀末の華やき』(45)、李昂『夫殺し』など個別の翻訳がある程度で、この段階では全面的な翻訳・紹介には至っていない。局面が変わるのは、一九九九年以降ほぼ毎年刊行される『新しい台湾の文学』全一二巻によって、戦後台湾の代表的な作家の小説がある程度読めるようになってからである。

李昂はこのシリーズの中に二巻収録されているが、『迷いの園』(46)では、台北のバーに英語・中国語併記のプラカードを持った闖入者が現れる冒頭から読者を迷宮に誘い込み、一人の女性が上昇志向の強い成功者である男に恋焦がれるが、やがて中絶によって逆に男との立場を転換させていく愛

の遍歴を描く。それを単にエレクトラ・コンプレックスに憑かれた女性が母性を拒否することで男権主義を打破する物語として読むのは表面的にすぎるだろう。そこには中国伝統文化を継承しながらも、家庭内で娘に台湾語と日本語しか話することを許さぬ父親の存在が暗示する、二二八事件に象徴される国民党による本省人弾圧・支配の戦後台湾史が影を落としているからである。一方『自伝の小説』(47)は、中国語原題も『自伝の小説』と日本語の「の」を使用して、ノンフィクションとフィクションを異言語で結ぶ斬新な発想が見える作品である。台湾共産党の伝説的指導者謝雪紅の一生を語る伝記風叙述と、謝雪紅と同世代の保守的な伯父を持つ「わたし」の回想的語りが同時に進む多声的な語りが目を引き。性愛も革命も、新たな共同体創設における自己実現の手段として、二〇世紀を駆け抜けた女性の壮烈な一生を描く時、伝記と小説の語りは二者択一的でなく、相互に融合・関与するものであることが分かる実践と言えよう。

李昂の実姉である施淑青の『ヴィクトリア倶楽部』(48)は、中国への返還問題に揺れる一九八〇年代香港を舞台にした小説だが、著者の施淑青は台湾の古い港町鹿港に育ち、国民党統治の戒厳令下で魯迅や張愛玲を愛読して文学に目覚め、アメリカ留学を経て七〇年代後半から九〇年代初頭まで香港で暮らした。東西文明が交差する植民地都市香港を舞台に、汚職の醜聞にまみれたイギリス人や大陸中国からの移民、法的制裁を求める香港人捜査官、渦中で翻弄される愛人らが登場するこの小説は、共同体のアイデンティティを追い求める台

灣出身の作家であればこそ書けたのかもしれない。ハーバード大学の王徳威は、施叔青の描く絢爛たる香港は鬼火の燐光のように一瞬の華やかさの陰に寒光を放っていると評するが（『從伝奇到志怪』）、燐光が揺らめくのは、台湾・中国・アメリカを視野に入れながら創作を行う施叔青の「過客」意識ゆえかもしれない。『ヴィクトリア俱樂部』を含む香港三部作を完成させた施叔青は、現在台湾三部作の第三部を執筆中である。

同じく都市小説ということ言えば、『台北ストーリー』（49）は作風の異なる七人の作家の作品を収録した短編集だが、共通主題は都市の記憶である。人間に記憶があるように、都市もまた歴史という記憶を抱えている。台北のように考古の時代から欧州人の統治、漢族の開拓、日本の植民地統治、国民党統治と都市空間のクロノロジーが多層的な物語を生成し得る場所を選んで、都市文学として戦後台湾の作品を読む意図の下に編集されている。中でも張大春の「將軍の記念碑」は、退役した国民党の將軍が時空を自由に動き来し、抗日戦争や国共内戦どころか自分の葬儀にも立ち会う奇譚だが、アメリカ留学経験のある息子は「それはあなたの歴史でしょう」と冷たく父親の歴史を拒絶する。個人の記憶を集団の記憶に接合して歴史化する作業がもはや世代間で共有できない戦後外省人社会を映し出した短編である。

同じく外省人二世の目から見た戦後台湾ということなら、朱天心『古都』（50）と朱天文『荒人手記』（51）は戦後台湾社会に流入して特権階層化した外省人の疎外感と漂泊するアイ

デンティティを、記憶と歴史を軸に表現している。朱天心『古都』の表題作は、京都で入手した日本語案内書によって台北を探訪する設定からして、記憶と歴史をめぐる複層的テクストが表出する。ここでは地名を手がかりとして共同体の記憶を巡る行為が、アイデンティティの彷徨どころか、その境界を融解させてしまう深淵にまで進んでしまう。同書に収録されている「ハンガリー水」では匂いという身体感覚が喚起する個人記憶が、もはや共同体の記憶にまで達し得ないアイデンティティの不安定さを描く。一方、朱天文『荒人手記』は、日本で客死した胡蘭成へのオマージュが序文として添えられ、レヴィ・ストロースからミシェル・フーコーまで、フェデリコ・フェリーニから小津安二郎まで、東京からパラナシまで、縦横無尽に言葉が駆け巡る中に、同性愛者の喪失感を描いている。セクシュアル・マイノリティをゲイと呼ぶことで逆に性的傾向を区分化してしまう陥穽を乗り越えて、すべてのマイノリティを包摂してクイアと呼ぶべきだと主張する登場人物の姿に、世紀末台湾のアイデンティティ彷徨が映し出されているように思える。

朱天文・朱天心は主として外省人の心性を描くが、実際には姉妹の母親は本省人である。「新しい台湾の文学」シリーズで本省人世界を描いた作品としては、短編集『鹿港からきた男』（52）と『客家の女たち』（53）、それに李喬『寒夜』（54）の三冊があるが、もちろんこれだけでは充分と言えず、今後更に多くの翻訳が行われるべき分野である。『鹿港からきた男』収録の黄春明・王拓・宋沢業・王慎和は郷土文学の作家

として紹介されることが多いが、実際には七〇年代郷土文学論戦で活躍する王拓・宋沢菜と、六〇年代モダンニズム文学からも評価される黄春明・王禎和では作風が異なる。だが八〇年代以降の台湾文学概念のプロトタイプ形成に繋がる郷土文学論戦に多義性・多様性があつたことを踏まえると、郷土と

いう概念が示す現実の人間生活への眼差しを共有する作家として捉えることは自然なように思える。表題作の王禎和「鹿港からきた男」は、ネイティヴィズムとモダンニズム双方から評価される彼の代表作で、他所からやってきた行商人に妻を奪取られる貧しい男の物語だが、小津安二郎やヘンリー・ジェームズへの関心を滲ませる小説である。黄春明「坊やの人形」は、若く貧しい夫婦が小さな誤解を通じていつそう愛を確かめ合う庶民の哀歓を綴った作品で、侯孝賢監督の映画でも知られる。また現在には政治家として活動している王拓「金水爐」は、行商をしながら苦勞して育てた息子たちに裏切られる母親の痛切な思いが胸を打つ作品で、郷土に拘る彼の代表作であり、映画化・演劇化も行われている。同じく短編小説を集めた『客家の女たち』は、台湾総人口の一五％を占める客家系漢民族作家の作品集で、台湾のエスニシティを考える上でも参考になる。愛する女性のために大陸体験を経験し、戦後台湾で病苦に喘ぎながらも純粹な愛を貫き通した鍾理和とその息子鍾鉄民、日本統治期に青春時代を送り戦後作家第一世代として活躍する鍾肇政、一九五〇年代に作家活動を始めて以来、常に台湾近代史に熱い関心を寄せ、戦後本省人作家の代表的存在となつた李喬まで、客家というキー

ワードで俯瞰することで台湾文学の別の一面が見えてくるという企画である。

李喬『寒夜』は、台湾近代史全体を俯瞰する壮大な大河小説『寒夜三部曲』の簡約本『大地の母』の日本語訳である。英訳に当って著者自ら三部作の「荒村」を削除し、残りの「寒夜」「孤灯」を簡約した『大地の母』に依拠した翻訳だが、一九八〇年代初頭に発表された原作『寒夜三部曲』を发表順に見ると、まず「寒夜」で日清戦争によつて日本の植民地統治が始まつた時期の農民の苦闘を描く。「孤灯」では日本の南洋侵略に動員されて命を落とした台湾青年への鎮魂歌と、日本統治終了前後の山村における人々の苦闘を描く。「荒村」は一九二〇年代末期日本の支配に抵抗する農民たちの闘いを描いている。この三部作は訳者が解説で「台湾の国民文学たりうる可能性を孕んだ作品」と位置づけているように、激動の歴史の大河を生き抜く台湾の人々を描くことで、客家系本省人の立場から台湾近代史全体を記述しようとする現代版神話のような壮大なスケールの小説である。簡約本では、日本軍人に凌辱されながらも愛する人を思い続け、フィリピンで命を落とす台湾人女性の悲劇など、重要なストーリーが収録されていないので、原作の完訳が待たれる。なお『寒夜三部曲』は二〇〇二年から〇四年にかけて台湾でテレビドラマとして制作・放映されている。

郷土文学論戦以降SF小説が多くなる張系國の『星雲組曲』(55)は、日本で初めて単行本として刊行された台湾SF短編集である。張系國は抗日戦争末期に大陸に生まれている

が、台湾で育っていて、その作品を読むと、親念的な故郷である大陸中国と現実的な故郷である台湾を接合する必要性に迫られ、中華民族意識を選択しているように思える。この点は彼の宇宙を舞台にしたSF作品に帰属意識の強調という形で表れている。二編の同名小説「帰還」や「傾城の恋」が典型的だが、宇宙空間であれ時間旅行であれ、自分が本来いるべき場所を求めて彷徨する登場人物の姿は、SFというよりアイデンティティ確認に心を傾ける張系国の鏡像ではないかと思える。もちろん「銅像都市」・「翻訳の傑作」・「シャングリラ」のような宇宙時代を生きる人間のペシミズムに彩られた作品もあるが、そこでも核心はやはり共同体と帰属意識である。

『新しい台湾の文学』シリーズ紹介の最後に、戦後台湾文学の代表的作家白先勇の『孽子』⁵⁶と『台北人』⁵⁷を取り上げるのは、白先勇という作家個人についてだけでなく、台湾文学を語る上でも意義のあることだろう。白先勇は一九三七年に国民党の要人白崇禧の息子として中国広西で生まれた。歴史に翻弄される亡命貴族のように重慶・上海・香港と居を移しながら、最終的に台湾に移住した。『孽子』は『台北人』と並ぶ白先勇の代表作だが、原文でも四〇〇頁近い一大長編小説であり、同性愛から家族関係や国家想像まで、また人間の細部から共同体のあり方までを視野に入れた、戦後台湾を生きる人々の魂の吃嗟のような、愛と記憶とアイデンティティをめぐる大ロマンである。台北市内の公園に夜毎集うゲイの若者たちは、いずれも父親から放逐された「不肖の

息子」で、彼らを庇護する老人たちは逆に息子を放逐した非情な父親としての過去を持つ。父親が体現する大陸中国の伝統と価値観から見れば、ゲイの若者たちはそれを継承しようとしただけで不肖であるばかりか、同性愛者であることで不道徳でもある。だがゲイの若者が求めるのは不可能に近い真実の愛であり、その中に放逐されてもお父親を追い求める父子関係の葛藤がある。そこにはセクシユアル・マイノリティから見える家や社会や国家、或いは個人と集団の記憶や歴史が大きな枠組みとしてあり、裏切られても挫折しても究極の愛を追求する若者群像を通じて、個人や家や社会や国家の姿が究極の形で見えてくる小説である。

『台北人』は『孽子』よりも早く、一九六〇年代半ばに執筆が開始された短編集で、白先勇の文学の持つ特徴が凝縮された作品と言える。台湾では一九六〇年に白先勇が学友と創刊した『現代文学』によって小説におけるモダニズム運動が勃興したとされるが、『台北人』収録作品はほぼみなこの『現代文学』に発表されている。国民党によるイデオロギー統制への反発も内包した六〇年代モダニズムは、西洋モダニズムの受容と中国古典文学との接合を特徴とすると言われるが、白先勇の場合、手法的にそれを踏まえながら、物語は大陸中国と台湾をめぐるノスタルジアと喪失感に溢れている。『梁父山の歌』・『国葬』のような国民党軍幹部の喪失感、『除夜』・『血のように赤いつつじの花』のような中下級兵士の大陸への望郷の思いは、いずれも権力構造の中のものたちの直線的なノスタルジアを描いているが、『台北人』の珠玉の作品

と言え、やはり「永遠の尹雪艷」・「最後の夜」・「孤窓花」・「遊園驚夢」のように、空間と時間のノスタルジアを乗り越えて生きていく女性を主人公とする短編だろう。「最後の夜」・「孤窓花」・「遊園驚夢」はいずれも映画化されるほどの劇的な物語構造を持つているが、例えば「孤窓花」では、上海での記憶を引き摺りながら戦後台湾に生きる女性の記憶と現実の葛藤と、母親が精神を病み、父親から凌辱された過去を持つ台湾人女性がヤクザ男を殺害する物語が交錯し、最終的に両者の人生は郷土台湾へ終着する。言わばこうした作品は、戦後台湾社会を背景とした外省人作家白先勇の新たな郷土台湾へのオマージュとして読める。そこには日本統治であり、大陸の抗日戦争・国共内戦であり、前世代の歴史記憶に距離を置きながら、戦後台湾社会に立脚して生きていく作家の、マニフェストとしての文学精神が宿っているように思う。

近年の台湾文学翻訳の特徴の一つは、こうした小説の翻訳と並んで、現代詩の翻訳が多いことである。アンソロジーとして『台湾現代詩集』(58)・『シリーズ台湾現代詩Ⅰ』(59)・『シリーズ台湾現代詩Ⅱ』(60)が先行して出版されたが、いずれも台湾側の編集を基礎としていた。その後刊行が始まった『台湾現代詩人シリーズ』(61)は、収録作品選定を詩人自身に任せながら、日本の研究者による編集を経て、詩人別に第八巻まで出版されている。陳千武・痲弦・林享泰・張錯・焦桐・許悔之・席慕蓉・向陽と並ぶ詩人の名前を見れば、戦後台湾現代詩がある程度俯瞰できる内容であることが

分かる。第二巻の痲弦は、中国から台湾へやってきた軍中詩人で、中国から切り離されながら中国文化への憧憬を担い、同時に台湾を支配する国民党軍人として台湾の人々とも同化できないため、その孤立の摩擦係数から「ハレルヤ」僕はまだ生きている／両肩で頭を担ぎ／存在と不存在を担ぎ／ズボンをはいた顔を担いでいる(62)と詠うシュールレアリスム詩人にならざるを得なかったのかもしれない。第四巻の張錯はマカオに生まれ、香港で育ち、台湾で学び、アメリカに住む典型的なディアスポラの文学者だが、「そんなにも渴望しているが／冷淡で／そんなにも接近していないが／遥かに遠い／それはもうひとつの遥望／もうひとつの甘い苦しみ」(63)と詠うリリシズムに、遙か中国を離れたエミグラントの哀しみが宿っている。一方台湾の歴史に向き合っている詩人を見れば、許悔之の「苦しみの果てには／悲しみはない／死の灰が／風に吹かれて荒野にまっけている」(64)や、向陽の「同じでないのは目／ぼくたちは／同時に道路の両側を見る／たぐさんの／足が行き来する／もし方向が違うのを／忘れていたのなら／ぼくはきみに答えてあげる／人の足を踏む場所が／すべて故郷だと」(65)という詩は、台湾に生きることの意味を言語によって極限まで内面化すれば、自ずと詩の言葉となることを理解させてくれる。

これらシリーズとは別に出版された楊牧の二冊の本にも触れておきたい。「いつかある日／太陽が頭上をすぎる頃／紫のカッコウアザミが広がる暖かなフォルモサに／恒久の存在がふみとどまるだろう」(66)と郷土台湾を詠う詩人楊牧が、

自らの人生を振り返った回想的文章『奇葉前書』(67)は、日本の植民地統治や国民党の専制政治の歴史を辿りながら、最後に台湾本来の居住者である先住民族とめぐり会う、魂の遍歴のような散文である。詩の言葉の持つ美しさと強さが、言葉の限界性と格闘する実践の一つとして印象的である。

一方、近年の台湾文学研究の進展が反映された翻訳の仕事として、昨年从今年にかけて刊行された『台湾セクシュアル・マイノリティ文学』全四巻がある。小説巻として邱妙津『ある鰐の手記』(68)、紀大偉作品集『膜』(69)、小説集『新郎新婦』(70)の三巻、及び評論巻の『クイア／酷児評論集』(71)から成り、台湾文学認知の段階を超えて、個別研究の発展によって台湾文学研究の深化を目指す動きが着実に進んでいることを示している。中でも邱妙津の『ある鰐の手記』は待望久しい翻訳である。一九九四年に発表されたこの小説は、『繊細でありながらひりつくような自我意識を核に、理解されたい願望と理解が不可能であることを知っている絶望の狭間に生きる若者が出会い、愛し、傷つけ合う姿を独白だけで語り』(72)、レズビアン小説としてだけでなく、人間関係や恋愛を究極まで追求した小説として台湾で大評判となり、九五年作者の自死という衝撃的なニュースによって、いっそう忘れたい作品となった。また『クイア／酷児評論集』は、セクシュアル・マイノリティ文学を台湾の研究者が、西洋文学理論を使ってどう分析しているかを知ることができる貴重な翻訳である。文学作品自体の翻訳ばかりでなく、その作品を台湾の人々がどのように読んでいるかを知る

努力が今後必要だろう。

翻訳の紹介の最後に締め括りとして、また将来の台湾文学研究の一つの道筋を指し示しているものとして、『台湾原住民文学選』にぜひ触れておきたい。一九九〇年代初頭に『悲情の山地』(73)が刊行され、先住民族の文学に少しづつ光が当るようになったが、同書は台湾の作家が編集した短編集の翻訳であり、また収録されている先住民族の作家は二人に止まっている。これに比べると『台湾原住民文学選』全九巻(74)は、日本における台湾先住民族文学の紹介と研究両面で大きな意義を持つ翻訳シリーズである。『名前を返せ』冒頭に収録されているモリーナノンの詩の「もしもある日／僕らが歴史のなかをさまようのを拒否したら／どうか真つ先に僕らの神話と伝説を書いてください／もしもある日／僕らが自分たちの土地のうえをさまようのをやめたら／どうか真つ先に僕らの名前と尊厳を返してください」(75)という言葉は、近代で言えば日本の植民地統治から中華民國体制に至るまで、サバルタンとして自分の言葉と尊厳を奪われ続けてきた先住民族の自己回復の叫びであり、外省人であれ本省人であれ、アイデンティティ探求の彷徨を続ける漢民族と異なり、先住民族は基本的なアイデンティティの確認すら困難な歴史を歩んできたことを改めて教えてくれる。この詩は中国語(漢語)で書かれているが、先住民族作家が「漢語の文法にあわない表現を意識的に用い、漢語の文法を壊すことでそこに原住民の痕跡を残し、原住民の抵抗を示す」(76)実践によって、漢語による戦後台湾文学に介入していく行為は、チ

ベット作家ザンダワやアーライの漢語作品など、大陸中国の非漢族漢語作品との共通性を感じさせ、また日本統治期に日本語作品を創作しながら、日本文壇から未熟な日本語としか評価されなかった台湾人作家の文学的営為(77)を髣髴とさせ、かつ実践の困難はそれ以上であることが想像できる。

その困難はまた、自らを語ることを特権化せずに、生命力に満ちた新たな創造へと先住民作家を向かわせる。リカ・ラッ・アウーは「原住民族文学創作における民族アイデンティティ——私の文学創作の歷程——」(78)で、大陸中国出身の軍人であつた父親とパイワン族の母親の間に生まれ、白色テロの時代に思想問題から監視状態にあつた父親の影響によつて中国古典文学を受容し、やがて知り合つた先住民作家によつて現代文学へと進んでいく人生を語る。自らの成長と共に、それまで引け目に感じていた母親の出自に自分のアイデンティティを求め、パイワン族の女性として生きていくことを選択するリカ・ラッ・アウーの意志の強さ、思惟の深さ、感性の鋭さこそ、優れた文学精神を生み出す源である。フランツ・ファノンが言うように「人は文化を出発点として民族を証明するのではなく、占領軍に抗して民衆の行なう闘いのなかで文化を表明するのだ」(79)としたら、主体性を既成の歴史・社会的条件から構築するのではなく、自己決定権によつて主体性構築の条件を作り出そうとするリカ・ラッ・アウーの強い意志こそ、先住民文学のみならず今後の台湾文学を創造する新たな力なのではないだろうか。その意味ではリカ・ラッ・アウーこそ台湾文学の内包を最も典型的に体现してい

る作家であるように思う。台湾文学の多元性・多層性とは、こうした先住民の文学を読むことでいつそう理解が深まるのではあるまいか。また、こうした台湾先住民作家の作品を読むと、霧社事件に象徴される先住民への血の弾圧すら歴史記憶として十分に教育できない日本の現状を反省せざるを得ず、その意味でもこうした翻訳の努力の尊さが実感できる。

以上様々な研究書や翻訳書を通覧すると、ここ二〇年の間に台湾文学研究の基礎が少しずつ築かれ、その蓄積の上に更に新たな研究が積み重ねられていくことがよく分かる。それは取りも直さず、台湾文学研究がまだ途上にあることの証明でもある。

注

- (1) 『台湾近現代史研究』一六号(一九七八—八八年)、龍溪書舎
- (2) 『咿咿』同人の研究の一端は『台湾文学の諸相』(緑蔭書房、一九九八年)に見える
- (3) 『台湾現代小説選』I『彩鳳の夢』(一九八四年)、II『終戦の賠償』(一九八四年)、III『三本足の馬』(一九八五年)。いずれも研文出版より刊行。
- (4) J・L・ナンシー『無為の共同体』以文社、二〇〇一年、一四〇—一四一頁
- (5) 下村作次郎『文学で読む台湾——支配者・言語・作家たち』田畑書店、一九九四年

(6) 移住時期の前後でなく、台湾の本来の居住者という意味から、著者は「原住民」と記している。現在台湾では「原住民族」という漢語表記が使われているが、同じ漢字を使用している、日本語ではその語義や文脈が異なるので、本稿では *native*、或いは *indigenous* を意識しながら先住民族と仮に表記しておく。「原住民族」、或いは他の新たな翻訳語が定着するまでの過渡的な呼称である。

(7) 黄英哲『台湾文化再構築一九四五—一九四七の光と影——魯迅思想受容の行方』創土社、一九九九年

(8) 北岡正子・秦賢次・黄英哲編『許寿裳日記』東京大学東洋文化研究所、東洋学文献センター叢書第六三号、一九九三年

(9) 垂水千恵『台湾の日本語文学——日本統治時代の作家たち』五柳書院、一九九五年

(10) 垂水千恵『呂赫若研究——一九四三年までの分析を中心として』風間書房、二〇〇二年

(11) 岡崎郁子『台湾文学——異端の系譜』田畑書店、一九九六年

(12) 陳映真「山道」(岡崎郁子訳)、前出『三本足の馬』所収

(13) 劉大任『デイゴ燃ゆ』(岡崎郁子訳) 研文出版、一九九一年(『台湾現代文学選』別巻として刊行)

(14) 鄭清文『阿里山の神木』(岡崎郁子訳) 研文出版、一九九三年

(15) 岡崎郁子『黄霊芝物語』研文出版、二〇〇四年。なお黄霊芝の小説が国江春著『宋王之印』(慶友社、二〇〇二年)と変名で刊行されたのは編者岡崎の意図による。

(16) 河原功『台湾新文学運動の展開——日本文学との接点』研文出版、一九九七年

(17) 河原功『翻弄された台湾文学——検閲と抵抗の系譜』研文出版、二〇〇九年

(18) 松永正義『台湾文学のおもしろさ』二〇〇六年、『台湾文学を考えるむずかしさ』二〇〇八年、いずれも研文出版より刊行。

(19) 下村作次郎・中島利郎・藤井省三・黄英哲編『よみがえる台湾文学——日本統治期の作家と作品』東方書店、一九九五年

(20) 余光中「総序」『中華現代文学大系』詩巻(巻)、台北・九歌出版社、一九八九年、二頁

(21) 同前、三頁

(22) 藤井省三『台湾文学この百年』東方書店、一九九八年

(23) 藤井省三『中国文学この百年』新潮社、一九九一年

(24) 李昂『夫殺し』(藤井省三訳) 宝島社、一九九三年

(25) 台湾文学論集刊行委員会『台湾文学研究の現在』緑蔭書房、一九九九年

(26) 藤井省三・黄英哲・垂水千恵編『台湾の「大東亞戦争」』東京大学出版会、二〇〇二年

- (27) 丸川哲史『台湾、ポストコロニアルの身体』青土社、二〇〇〇年、『台湾における脱植民地化と祖国化——二二八事件前後の文学運動から——』明石書店、二〇〇七年
- (28) 森宣雄『台湾／日本——連鎖するコロニアリズム』インパクト出版会、二〇〇一年
- (29) フェイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール——植民地期台湾の日本語文学』（林ゆう子訳）、慶應義塾大学出版会、二〇〇七年
- (30) 孤蓬万里『台湾万葉集』集英社、一九九四年
- (31) フェイ・阮・クリーマン『大日本帝国のクレオール』、一四頁
- (32) 呉密察・黄英哲・垂水千恵編『記憶する台湾——帝国との相剋』東京大学出版会、二〇〇五年
- (33) レオ・チン『思考不可能性としての霧社事件——植民地性、原住民性とコロニアル差異の認識』、『記憶する台湾——帝国との相剋』、一〇五頁
- (34) 松浦恒雄・垂水千恵・廖炳惠・黄英哲編『越境するテキスト——東アジア文化・文学の新しい試み』研文出版、二〇〇八年
- (35) 池田浩士『海外進出文学』論序説』インパクト出版会、一九九七年
- (36) 葉石濤『台湾文学史』（中島利郎・澤井律之訳）研文出版、二〇〇〇年。なお中島利郎編著『日本統治期台湾文学小事典』は本書の訳注を発展させたものである。
- (37) 彭瑞金『台湾新文学運動四〇年』（中島利郎・澤井律之訳）東方書店、二〇〇五年
- (38) 山口守編『講座台湾文学』国書刊行会、二〇〇三年
- (39) 酒井直樹『日本思想という問題』岩波書店、一九九七年、二五頁
- (40) 中島利郎・河原功・下村作次郎監修『日本統治期台湾文学集成』緑蔭書房、二〇〇二年
- (41) 河原功・川村湊・白川豊・杉野要吉監修『日本植民地文学精選集』ゆまに書房、二〇〇〇年
- (42) 中島利郎・黄英哲編『周金波日本語作品集』緑蔭書房、一九九八年
- (43) 山口守監修『バナナポート——台湾文学への招待』JICC出版局、一九九一年
- (44) 朱天文『安安の夏休み』（田村志津枝訳）筑摩書房、一九九二年
- (45) 朱天文『世紀末の華やき』（小針朋子訳）紀伊国屋書店、一九九六年
- (46) 李昂『迷いの園』（藤井省三監修・櫻庭ゆみ子訳）国書刊行会、一九九九年
- (47) 李昂『自伝の小説』（藤井省三訳）国書刊行会、二〇〇四年
- (48) 施叔青『ヴェイクトリア倶楽部』（藤井省三訳）国書刊行会、二〇〇二年
- (49) 白先勇・張系國・朱天文ほか『台北ストーリー』

- (山口守編訳、池上貞子・三木直大・渡辺浩平訳) 国書刊行会、一九九九年
- (50) 朱天心『古都』(清水賢一郎訳) 国書刊行会、二〇〇〇年
- (51) 朱天文『荒人手記』(池上貞子訳) 国書刊行会、二〇〇六年
- (52) 黄春明・王拓・宋沢萊・王禎和『鹿港からきた男』(山口守編訳、垂水千恵・三木直大・池上貞子訳) 国書刊行会、二〇〇一年
- (53) 鍾理和・李喬・彭小妍・吳錦發・鍾鉄民・鍾肇政『客家の女たち』(松浦恒雄監訳、阿部悟・澤井律之・三木直大・渡辺浩平訳) 国書刊行会、二〇〇二年
- (54) 李喬『寒夜』(岡崎郁子・三木直大訳) 国書刊行会、二〇〇五年
- (55) 張系国『星雲組曲』(山口守・三木直大訳) 国書刊行会、二〇〇七年
- (56) 白先勇『孽子』(陳正醒訳) 国書刊行会、二〇〇六年
- (57) 白先勇『台北人』(山口守訳) 国書刊行会、二〇〇八年
- (58) 林水福・是永駿編『台湾現代詩集』(是永駿・上田哲二訳) 国書刊行会、二〇〇二年
- (59) 林水福・是永駿編『シリーズ台湾現代詩I』(上田哲二・島由子・島田順子訳) 国書刊行会、二〇〇二年
- (60) 林水福・是永駿編『シリーズ台湾現代詩II』(松浦恒雄・上田哲二・島田順子訳) 国書刊行会、二〇〇四年
- (61) 『台湾現代詩人シリーズ』①『暗幕の形象…陳千武詩集』(三木直大編、二〇〇六年)、②『深淵…痙攣詩集』(松浦恒雄編訳、二〇〇二年)、③『越えられない歴史…林享泰詩集』(三木直大編訳、二〇〇六年)、④『遙望の歌…張錯詩集』(上田哲二編訳、二〇〇六年)、⑤『完全強壯レシビ…焦桐詩集』(池上貞子訳、二〇〇七年)、⑥『鹿の哀しみ…許悔之詩集』(三木直大編訳、二〇〇七年)、⑦『契丹のバラ…席慕蓉詩集』(池上貞子編訳、二〇〇九年)、⑧『乱…向陽詩集』(三木直大編訳、二〇〇九年)。いずれも思潮社より刊行。なお第一巻『陳千武詩集』だけは原著者自身による日本語詩集である。
- (62) 『深淵…痙攣詩集』、一〇八一—一〇九頁
- (63) 『遙望の歌…張錯詩集』、二二頁
- (64) 『鹿の哀しみ…許悔之詩集』、二七頁
- (65) 『乱…向陽詩集』、三二頁
- (66) 『カッコウアザミの歌…楊牧詩集』(上田哲二編訳) 思潮社、二〇〇六年、二〇六頁
- (67) 楊牧『奇萊前書——ある台湾詩人の回想』(上田哲二訳) 思潮社、二〇〇七年
- (68) 邱妙津『ある鰐の手記』(垂水千恵訳) 作品社、二〇〇八年
- (69) 紀大偉作品集『膜』(白水紀子訳) 作品社、二〇〇

八年

- (70) 『新郎新「夫」』(白水紀子編) 作品社、二〇〇九年
- (71) 『クィア／酷児評論集』(垂水千恵編) 作品社、二〇〇九年
- (72) 山口守「彷徨うセクシュアリティ——フェミニズム小説からレスビアン小説まで」『ユリイカ』六月号、青土社、一九九八年、二八三頁
- (73) 呉錦発編著『悲情の山地』(下村作次郎監訳) 田畑書店、一九九二年
- (74) 下村作次郎、孫大川、土田滋、ワリス・ノカン編『台湾原住民文学選』第一巻「名前を返せ…モーナノン集／トパス・タナビマ集」(下村作次郎編訳、二〇〇二年)、第二巻『故郷に生きる…リカラツ・アウー集／シャマン・ラボガン集』(魚住悦子編訳、二〇〇三年)、第三巻『永遠の大地…ワリス・ノカン集』(中村ふじゑほか編訳、二〇〇三年)、第四巻『海よ山よ…十一民族作品集』(柳本通彦ほか編訳、二〇〇四年)、第五巻『神々の物語…神話・伝説・昔話集』(紙村徹編、二〇〇六年)、第六巻『晴乞い祭り…散文・短編小説集』(下村作次郎編訳、二〇〇八年)、第七巻『海人・獵人・シャマン・ラボガン集／アオヴィニ・カドウスガヌ集』(魚住悦子・下村作次郎編訳、二〇〇九年)、第八巻『原住民文化・文学言説集Ⅰ』(下村作次郎ほか編訳、二〇〇六年)、第九巻『原住民文化・文学言説集Ⅱ』(下村作次郎編訳、二〇〇七年)。いずれも草風館より刊行。
- (75) 『名前を返せ…モーナノン集／トパス・タナビマ集』、九頁
- (76) 同前、三二二頁
- (77) 日本文壇からの「未熟な日本語」という評価については、筆者自身以下の文章で少し論じたことがある。山口守「想像／創造される植民地——楊達と張赫宙」『記憶する台湾』東京大学出版会、二〇〇五年)、及び「植民地・占領地の日本語文学——台湾・満洲・中国の二重言語作家」(岩波講座『「帝国」の学知』第五巻『東アジアの文学・言語空間』岩波書店、二〇〇六年)
- (78) リカラツ・アウー「原住民文学創作における民族アイデンティティ——私の文学創作の歷程——」『原住民文化・文学言説集Ⅰ』(下村作次郎ほか編訳) 草風館、二〇〇六年
- (79) フランツ・ファノン『地に呪われたる者』(鈴木道彦・浦野衣子訳)、みず書房、一九六九年、一二七頁